

# 新たな価値を創造する生徒の育成（3年次／3年計画）

## ～「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした実践を通して～

研究主任 進藤 秀俊

### 1. はじめに

2016年のダボス会議以降、世界共通の現状認識としてVUCAという考え方が広まった。VUCAとは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をとった語で、あらゆるものを取り巻く環境が目まぐるしく変化し、将来の予測が困難な状態を指したものである。ロシアによるウクライナ侵攻、新型コロナウイルス感染症のパンデミック、地球環境問題、貧困問題、社会構造の変化など、生徒が生きている世界、これから生きていく未来はまさにVUCAの時代であるといえる。そのような時代を生き抜くためには、目の前の現実、直面する困難や課題に向き合い、新たな価値を創造して、よりよく解決することが必要となる。

日本政府は、これからの時代にあって誰もが快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることのできる人間中心の社会をつくることを目指して、未来の社会像としてSociety 5.0を提唱している。AI技術が飛躍的に発達し、Iotによってすべての人とモノが結びつくSociety 5.0にあって、人間の役割は社会の様々な課題の解決に向かって、Iot、AI、ビッグデータ、ロボットを活用して新たな価値を創造することにこそある。

本校をはじめとした山梨大学附属校園では、上に述べたような社会の変化の中にあって、生徒たちが生涯にわたって、より豊かな人生を歩み、より豊かで公正な社会の形成に携われるよう、「附属4校園の教育活動を貫く育成を目指す『子ども像』」として、「個人の尊厳を重んじ、多様な文化や価値観を受け入れ、自ら課題を見出し、解決に努力する積極性・先見性・創造性に富んだ子ども」を掲げ、日々の教育活動、研究活動に取り組んでいる。

### 2. 研究の背景

#### （1）生徒の実態

本校では、生徒の学びについて実態を把握するために、2020年度より全体研究の共同研究者である山梨大学の田中健史朗准教授（カウンセリング心理学）の協力を得て、アンケート調査を実施している。本年度は、新しい研究に関わる生徒の実態をつかむため、昨年度までのアンケートに修正を加えて実施した。41項目からなるアンケート調査で、生徒の学びを次の3つの観点から調査するものである。

ア. 学習におけるメタ認知活動（現在の学習状況を考慮し、後の学習の進行を調整する方略）

イ. 学習に対する動機づけ

（文部科学省の掲げる主体的な学びにおける「学ぶことに興味をもつ」、「自己のキャリア形成の方向性と関連づける」と関連する概念）

ウ. ライフキャリア・レジリエンス（不安定な社会のなかで自らライフキャリアを築き続ける力）

分析結果は次のとおりである。（田中、2023）

主体的な学びと関連する変数を調査したが、附属中学校の生徒さんの回答としては、すでに主体的な学びのプロセスを回すことが出来ており、自律的な動機づけをもち、高いライフキャリア・レジリエンスを有しているという結果であった。効果的な学習方略とされるメタ認知活動の得点や、同一化的調整という自律的な学習を促すとされる動機づけの得点、ライフキャリア・レジリエンスの得点については、どの学年でもほぼ満点であった。

上述のように、主体的な学びを実現するために重要とされる要因をどの学年の生徒もしっかり有していると考えられる。しかし、さらに上を目指すうえでは、課題が2点明らかになった。1つ目は、学習自体に楽しさを感じる内的調整の得点が、他の動機づけ得点と比較すると、低い得点となっている。学習すること自体への楽しさを感じてもらおうという点については、介入の余地があるかもしれない。その傾向は、2年生と3年生でより強くみられている。受験が迫ってきたり、学習内容が難しくなったりするなかで、学習内容自体の面白さを感じさせる授業をする余裕がなくなってくるのが考えられる。実際的な問題として、ひとつひとつの単元において学習内容自体に面白さを感じられる授業実践をするのには限界がある。そのため、それぞれの授業でわざわざ授業内容自体に面白さを感じられる工夫を頻繁にしなくても、生徒自身が学習内容の面白さを主体的に見いだせるように、実生活と関連づけたり、生徒自身のキャリアと関連づけたりする習慣を身に着ける訓練を意識的に行う授業実践の工夫は必要かもしれない。

2点目は、メタ認知活動の得点に代表されるように、2年生の主体的な学びに関する得点が相対的に低い傾向がみられた。あくまで相対的な比較ではあるが、主体的な学びに関わる学習方略（主体的な学びの

プロセス)の使用頻度が低くなったり、自律的な動機づけが下がったりしやすいことが予測される。このことから、特に第2学年において主体的な学び(自己調整学習と自律的な動機づけ)を意識した介入と考えられる。

不安定な社会のなかで自らライフキャリアを築き続ける力であるライフキャリア・レジリエンスを促進する要因として、学習に対するメタ認知活動および動機づけの影響を検討したところ、メタ認知活動が重要な影響を与えることが示された。つまり、主体的な学びのプロセスモデルを身に着けている生徒ほど、社会に出てから必要となるライフキャリア・レジリエンスの力が高くなっているということである。附属中学校の生徒さんのライフキャリア・レジリエンスの得点は多くの因子でほぼ満点という状態であり、社会に出てからも継続的に活動する力を有していると考えられる。しかし、相対的には継続的対処と楽観的思考の得点が低い傾向がみられた。メタ認知活動はそれらを高める可能性が示唆された。さらに、継続的対処については、学習内容に対する面白さを感じられる内的調整の得点が有意な正の影響を与えていた。そのため、学習内容の面白さを自ら気づける(実生活と関連づけたり、生徒自身のキャリアと関連づけたりする習慣が身につけている)という力を育むことは、社会に出てからの粘り強く活動する力につながると考えられる。そういう観点からも、学習内容の面白さを感じられる方略を身に着けさせる介入が必要になってくるだろう。

この分析を踏まえると、生徒が継続して主体的に学び続けたり、学習内容に面白さを感じたりできるような授業づくりをこれまで以上に意識して行う必要があると考える。

## (2) 附属4校園の共同研究

山梨大学附属校園では、昨年度より「『きりのは』で育む 未来を拓く子ども～附属4校園の連携による『非認知能力』の育成～」の研究主題のもと、共同研究に取り組んでいる。

本校では、非認知能力のうち、とくに GRIT に着目している。GRIT とは、Guts (度胸、困難に立ち向かう勇気)、Resilience (復元力、立ち直る力)、Initiative (自発性、自ら目標を設定し取り組む力)、Tenacity (執念、最後までやり遂げる力)の頭文字をとった語で、「困難な目標への情熱と粘り強さ」を意味する。GRIT には、「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」という2つの側面がある。「興味の一貫性」とは、興味があちこちせず、数か月あるいは数年にわたって自分にとっての重要目標から関心がぶれない傾向のことを指す。「努力の粘り強さ」とは、目標追求の中で困難や挫折に直面しても、あきらめずに粘り強く努力し続ける傾向のことを指す。GRIT を育むことで、生徒は、学習内容に対する興味・関心をもち続けるとともに、自ら見出した課題に対して粘り強く努力し続けるようになると思われる。

国立教育政策研究所発行の『学習評価の在り方ハンドブック』によると、主体的に学習に取り組む態度には、「粘り強く取り組む」側面と「自らの学習を調整する」側面がある。これは GRIT をもった生徒の姿と一致するものである。

田中准教授の助言を受けて、GRIT を高めるための支援として、「自己調整学習を促す指導」と「モチベーションを高める指導」を実践したい。「自己調整学習を促す指導」についてはそれぞれの学習過程における「学習方略」をスキルとして伝えたり、共有したりして、身につけさせたい。「モチベーションを高める指導」については、自律性、有能さ、関係性、価値づけなどに着目した指導を行いたい。この指導は、「自己調整学習を促す指導」のもとに行われた学習活動を下支えするものとなる。

これらの支援は、観点別学習状況評価(ここでは「学習改善につなげる評価」を指す)のうち、主体的な学習に取り組む態度の評価において、A 評価や B 評価の生徒の主体的な学びをより推進するだけでなく、C 評価の生徒に対する支援策としても有効であると思われる。

## (3) これまでの研究の経過

本校では、これまで生徒の実態を踏まえた授業研究を中心に据えて、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を高めるための研究を積み重ねてきた。

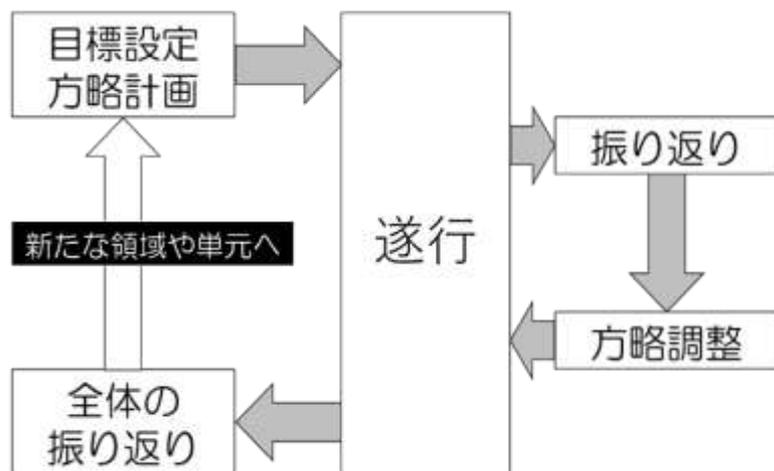
一昨年度までの2年研究では、研究主題に「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成」と掲げ、「創造性」を育むことを目指した。「創造性」を「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」と定義した。これは、学習指導要領(平成29年告示)において、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」として例示された「新たな価値を生み出す豊かな創造性」に関わるものである。昨年度までの研究においては、「創造性」をより明確にするために、3つの資質・能力の柱に沿って整理した。(表1)

表1 「創造性」の整理

知識及び技能	課題の解決に必要な知識・技能
思考力、判断力、表現力等	課題の解決に向かって考え、意味や価値を創造する力
学びに向かう力、人間性等	自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度。

このうち、学びに向かう力、人間性等にあたる「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」について育成が不十分であると考え、重点的に取り組むこととした。その具体的な生徒の学びの姿は、「主体的に学ぶ姿」であり、エンゲージメントという概念に着目して捉えた。すなわち、本校の考える「主体的に学ぶ姿」とは、エンゲージメントが高められた姿であり、「生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿」である。

生徒のエンゲージメントを高め、「主体的な学び」を実現するために、チャールズ・M・ライゲルースによる「自己調整学習のための連続変化フレームワーク」を参考に、本校全体研究の共同研究者である山梨大学の田中准教授の助言をもとに、「主体的な学び」のプロセスモデルを考案した。（図1）



	エンゲージメントの高まり（生徒の姿）
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。</li> <li>挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。</li> </ul>
方略計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゴールを設定し、過去の学習経験を生かしながら、課題解決のための学習方略を考える。</li> </ul>
遂行	<ul style="list-style-type: none"> <li>計画に基づいて、学習を遂行する。</li> <li>計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。</li> </ul>
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学びの効果を振り返る。また、学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。</li> </ul>
方略調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要に応じて学習方略を修正する。</li> </ul>
全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らの学びの質や成果を振り返る。</li> <li>学ぶ面白さや楽しさを感じたり、有能感や充実感をもったりする。</li> </ul>

図1 「主体的な学び」のプロセスモデル

また、生徒が「主体的な学び」を実現できているかを評価し、授業改善に生かすために、生徒の学びの姿や教育心理学の知見、田中准教授のアドバイスを踏まえ、主体的に学習に取り組む態度の評価の枠組みを設定した。（表2）

表2 主体的に学習に取り組む態度の評価の枠組み

評価の観点	評価規準		Cの生徒を Bに高める手立て	
	A	B		
		粘り強く学ぶ		自己調整しながら学ぶ
目標設定	学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていることが見取れる姿	単元の学習内容を、他教科の学習や自らのキャリア、生活、自らが生きる社会と関連づけて学習に取り組もうとしている。単元の学習内容に興味や価値を見出して取り組もうとしている。	単元の目標に沿った、自分なりの学習目標を立てている。	目標の立て方の例を示す。 他の生徒が立てた目標を紹介する。 単元間のつながりや他教科とのつながりを説明する。 学習内容を生徒の関心や生活と関連づけて説明する。 学習内容の実践的価値を示す。

方略計画		自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を考えようとしている。	過去の学習経験を生かしながら、目標達成のための学習方略を考えている。	類似する内容を学んだ時の学習方略を例として示す。
遂行		自らの学習目標の達成を目指して、粘り強く学習に取り組んでいる。	計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加している。	生徒の学習活動について、個人や集団など様々な単位で肯定的な声かけを行う。
振り返り		自らの学習方略の成果と課題をよりの確にとらえようとしている。	自らの学習方略をモニタリングし、その成果や課題を挙げている。	生徒の振り返りに対してフィードバックを行う。
方略調整		自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を求めて、必要な修正を続けようとしている。	必要に応じて学習方略を修正している。	他の生徒の振り返りや方略調整について紹介する。
全体の振り返り		単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことを明確にしている。	単元の学習を通して、自らの目標達成のために工夫したことやその成果と課題を明確にしている。また、それを次の学習に生かそうとしている。	生徒の具体的な学習活動の様子を挙げるとともに、振り返るための視点を具体的に示す。

今後さらに研究を深めたい点として、以下の2点が挙げられる。

- (i) 「創造性」をより明確にして、授業実践と結びつけ、生徒たちに「創造性」を身につけさせること。
- (ii) 生徒自身に「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させ、学びに向かわせること。

### 3. 研究内容について

#### (1) 新たな価値を創造する生徒

「新たな価値を創造する生徒」とは、「創造性」を身につけた生徒である。「創造性」について、ロンドン大学で理論物理学の主任を務めた、ボーム (2013) は以下のように述べている。

新しい、馴染みのない何かを見つけることができる真の知覚が働くには、人が注意深く、機敏で、よく気づき、繊細であることが必要です。この精神の枠組みの中で、人は何かを行い、そしてそこから、実際に起こることと、以前の知識から推断されたこととの相違に気づきます。この相違から人は、その相違を説明する新しい知覚または新しい着想へと導かれます。そしてこの過程は、どの分野であれ、初めも終わりもなく、延々と続いていくことができるのです。

また、聖心女子大学教授の水島 (2021) は、創造性教育について次のように述べている。

創造性やアート教育で育まれるのは概念や意味を捉えて表現する力。例えば『りんご』を見たときに、動物は『食べ物』としてのみ認識しますが、人間はほかにも『アダムとイブ』を思い浮かべたり、iPhoneを思い浮かべたり、同じものでも象徴や概念として捉えることができます。あるいは同じ〇(まる)でもそれがりんごだったり、顔だったり、月だったり、そこにその人の意図や解釈、意味があります。そうした概念や意味で捉えることができるのは、人間が根源的に持っている資質です。創造性教育は人間が本来持っている、目の前にないものを読み取ったり、生み出すことを学ぶことだと考えています。

さらに、元カリフォルニア州立大学ロングビーチ校美術学部教授のエドワーズ (2014) は、創造性に関わって「創造的な人びとはよく、誰も気づかなかったような問題を積極的に探って見つけだし、解決しています。」と述べている。つまり、「創造性」には「自ら周囲に目を向け、積極的に課題を見出し、解決する力」も含まれていると考えられる。たしかに、課題の解決という目的がなければ、創造性を発揮する動機づけも生まれえないといえる。ここでいう「課題」は「自ら周囲に目を向けて」見出すものなので、社会全体の課題だけでなく、生徒自身の身の回りで見られる事象に対しての問いも含まれるといえる。

すなわち、「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その課題に関わる事象について自分なりに新たな意味や考え方を見出すことで解決する資質・能力」である。「創造性」を発揮して見出された「新たな意味や考え方は、課題を解決するものであり、自分自身や周囲の人々の人生や社会全体をより豊かに、よりよくする「新た

な価値」をもつものである。

脳科学者の茂木（2005）は、「創造するということは、過去の体験や記憶を、組み合わせを変え、結びつきを変えて、アウトプットすることです」と述べている。「創造性」を発揮するためには、これまでに得た知識や経験を結び付けたり、これまでとは異なる視点や文脈の中で捉えたりすることが必要である。また、第4次産業革命が進展する現代社会にあっては、新しい知見の発見や技術革新の成果を積極的に取り入れて、これまでに得た知識や経験と結び付け、新たな意味や考え方を見出すことも求められる。

（2）「新たな価値を創造する生徒」を育成するために

学習指導要領解説 総則編（第3章第1節の2の（2））や国立教育政策研究所が示した「21世紀型能力」、知的財産戦略本部第3回検証・評価・企画委員会資料「初等中等教育における創造性の涵養と知的財産の意義の理解に向けて」等を参考に、「創造性」を資質・能力の3つの柱に沿って整理すると次のようになる。（表3）

表3 「創造性」の整理

学習指導要領解説総則編 （第3章第1節の2の（2））	国立教育政策研究所 「21世紀型能力」	知的財産戦略本部第3回検証・評価・企画委員会資料
・感性を豊かに働かせながら、思いや考えを基に構想し、新しい意味や価値を創造していく資質・能力	・問題の発見・解決、新しいアイデアの生成にかかわる問題解決・発見力・創造力 ・日常生活や社会、環境の中に問題を見つけ出し、自分の知識を総動員して、自分やコミュニティ、社会にとって価値のある解を導くことができる力	・創造的な思考等の基礎となる知識・技能 ・創造的に思考・判断・表現する力 ・新たな知的創造に向かう情意や態度等

○上記を参考に設定した本校で考える創造性

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
課題の解決に必要な知識及び技能	自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力	自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度

表3を踏まえて考えると、生徒に「創造性」を育むためのスタートは、学びに向かう力、人間性等として整理された「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」にあると考えられる。なぜならば、自ら課題を見出すことから「創造性」は発揮されるからだ。その意味で、「創造性」を育むことを目標に掲げた昨年度までの研究では、主に「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」の育成を目指して、「主体的な学び」のプロセスモデルを考案し、それに基づいた授業実践を行い、その有効性を明らかにすることができた。同じく「創造性」の育成を目標に掲げた本研究においても、引き続き「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた授業実践を行うべきであると考えられる。その上で、昨年度までの研究の成果と課題を踏まえ、とくに、次の2点に重点的に取り組みたい。

- (i) 生徒自身に「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させながら、学びに向かわせる手立てについて明らかにすること。
- (ii) 「創造性」のうち、思考力、判断力、表現力等として整理された「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立てについて、知識及び技能、学びに向かう力、人間性等の育成との関連を意識しながら明らかにすること。

### (3) 研究計画

1年次	<p>○上記 (i) について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「主体的な学び」を生み出すために、生徒が没頭できるような「目標設定」の仕組み方について考え、実践する。</li><li>・生徒に自らの学びをモニターさせ、「主体的な学び」のプロセスモデルを意識しながら、学習を調整させるための手立てを考え、実践する。</li></ul> <p>○上記 (ii) について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を高めるための手立てを考え、実践する。</li></ul>
2年次	<p>○上記 (i) について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を生徒の学習活動から取り上げて明確化する。</li><li>・「学習方略」をもとに、生徒が自らの学習を評価し、学び方を選ばせたり、修正させたりするための手立てを考え、実践する。</li></ul> <p>○上記 (ii) について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・各教科において、「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」について定義する。</li><li>・「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結びつけ、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育むための学習活動等を考え、実践する。</li></ul>
3年次	<ul style="list-style-type: none"><li>・1、2年次の研究成果を整理し、「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした、「新たな価値を創造する生徒」を育むための授業実践のあり方についてまとめる。</li></ul>

## 4. 1年次の研究

(1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立て

### ①「目標設定」：生徒を没頭させる教材

「主体的な学び」のプロセスモデルの「目標設定」の学習過程について、生徒が深い興味・関心をもてるような教材の開発や教材の提示方法、発問などの工夫について明らかにすることを目指した。生徒の実態を正確に把握するとともに、教師が見方・考え方を働かせて開発した教材を用意すること、生徒が見方・考え方を働かせて、自らの課題意識をもてるような問いかけ、学習活動を仕組むことが必要になると考えた。

### ②「振り返り」「全体の振り返り」：自らの学びのモニターと調整

「主体的な学び」のプロセスモデルの「振り返り」「全体の振り返り」の学習過程において、ICT を活用して、生徒が自分自身や仲間、教師、教材等と対話しながら自らの学びを振り返り、課題解決に向かって自らの学びを調整できるよう指導・支援を行った。

その際、メタ認知の概念を参考にしたい。北尾(2020)は、メタ認知を「メタ認知知識」と「メタ認知制御」が相互に深く関係し、自分自身の学びを監視しコントロールする能力であると説明している。「メタ認知知識」とは、「どのような要因や方略が影響するのか」、「方略を、いつ、どのように適用すればよいのか」という学び方についての知識である。また、「メタ認知制御」とは、「認知活動のプランづくり(プランニング)」、「認知活動の監視と制御(モニタリング)」である。

「振り返り」「全体の振り返り」の学習過程において、生徒の学びを自分自身でモニタリングさせるとともに、学び方についての知識を示して、次時以降の学習に取り組む際の学習方略を選択させたり、次単元の「目標設定」に取り組みせたりするなど、自らの学びをどのように変えれば良いかプランニングさせようとした。

上に述べた2点は、中央教育審議会答申(令和3年)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」の中で示された「個別最適な学び」と「協働的な学び」に関連が深いと考える。生徒の興味・関心等を重視するとともに、個々の生徒の特性や学習進度に合わせた指導・支援を行うという点において、「指導の個別化」、「学習の個性化」に当たると考えられる。また、多様な他者の影響を受けながら学習を進めるという点において「協働的な学び」であるといえる。

(2) 「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立て

「新たな意味や考え方を見出す」ためには、課題の解決を意識しながら、知識や経験を結びつけ、その意味を改めて問う学習やこれまでとは異なる視点や文脈を与え、その中で考えさせる学習を仕組むことが必要であ

ると考えた。

これは、各教科における見方・考え方と関連の深いものであると考えた。各教科の本質とは何か、本校における過去の研究成果（とくに平成 29 年度～平成 31 年度）などを生かしながら考え、どのような教材、発問、学習過程などが有効なのか検証したいと考えて授業を仕組んだ。その際、各教科において育成を目指す資質・能力のうち、思考力、判断力、表現力等との関連について整理する必要があると考えた。

また、3つの資質・能力の柱は相互に関連し合っており、バランス良く育むべきものであることを留意して授業実践を行った。

## 5. 1年次の成果と課題

### (1) 各教科で捉える「創造性」

「2.研究の背景」(3)で述べたとおり、本研究では「創造性」をより明確にして、その育成の手立てを授業実践として示すことを研究のスタート地点の一つにしている。そこで、初めに各教科で捉える「創造性」を明確にした。(表4)

表4 各教科で捉える「創造性」

国語	「新たな価値を創造する」ことを「言葉の価値を創造する」とし、以下のように定義する。 言葉を用いて行われる全ての活動を通して、生徒自身が言葉の意味や使い方を吟味、熟考することにより、自分の中に存在しなかった言葉の新たな価値に気づいたり、言葉による見方・考え方を働かせることで、既存の言葉の捉え方から脱し、新たな意義に気づいたりする力。そこから自己の言葉の世界を広げ言葉そのものの面白さや良さに気づく力
社会	自分たちが生きる社会について自ら課題を見出し、その解決を目指して、関連する社会の有り様について考察したり、社会の在り方について選択・判断したりする資質・能力
数学	①日常生活や社会の問題を数理的にとらえることについて、事象の数量等に注目して数学的な問題を見いだす力や、事象の特徴を捉えて数学的な表現を用いて表現する力（事象を数理化する力） ②数学の事象における問題を数理的にとらえることについて、数学の事象から問題を見いだす力や、事象の特徴を捉え、数理化する力、得られた結果を基に拡張・一般化する力 ③解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすることについて、得られた結果を元の事象に戻してその意味を考える力や、様々な事象を活用する力 ④解決過程を振り返るなどして概念を形成したり、体系化したりすることについて、数学的な見方・考え方の良さを見いだす力や、得られた結果を基に批判的に検討し、体系的に組み立てていく力、見いだした事柄を既習の知識と結び付け、概念を広げたり深めたりする力、統合的・発展的に考える力 ⑤単元を通じた学び全体を振り返り、新たな領域や単元へ学びをつなげていく力
理科	批判的思考を行う際の多面的な思考を支える思考
音楽	様々な音楽に触れ、楽曲の特徴や、その曲想をもたらしている諸要素に焦点を当て、生徒が音楽の多様性を感じ取り、理解することを繰り返したり、作品には、作曲者の思いや意図、生き様、時代背景などを知ったりすることにより、新たな見方、考え方、聴き方や感性を働かせる力
美術	自らの経験などをもとに対象や事象に向き合い、作品を通して「何を表したいか」を問いかけることで主題を生み出し、主題を「どのように表現するか」を形や色、描き方などを考え解決する中で生まれる新たな意味や価値をつくりだすために資質・能力
保体	保健体育科で捉える「創造性」を評価の3つの観点から考えると「知識及び技能」は、自ら見出した課題の解決に必要な資質・能力が備わり、「思考力・判断力・表現力等」では、課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結び付け、新たな意味や考え方を見出したり試してみたりする資質・能力である。「学びに向かう力・人間性等」は、課題の解決に主体的に取り組もうとする態度であり、何回も挑戦したり試してみたりしながら改善や解決に向けて調整を試みる資質・能力である。
技術	自らの生活や経験を振り返り、より便利なものとなるように、どのような加工をするのか、どのような機能をつけるのか等の工夫をして、設計・製作を行う力 製作活動を行う中で、何度も課題と向き合い、解決していく中で新たな価値を見出し、作品に活かす資質・能力
英語	自らの目標をもち、課題を認識した上で、それを解決するために既習事項や背景知識、経験則などを新たな言語材料や英語表現と結びつけながら活用して試行錯誤を繰り返し、学習の成果を踏まえて新たな学習へとつながりをもたせて学び続ける力

生徒に育成したい資質・能力は、具体的な生徒の学びの姿として示されて初めて、授業実践に生かされると考える。今後は、各教科における「創造性」の捉えを具体的な生徒の学びの姿として示すことが必要である。

(2) 「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立て

各教科で単元を構成する際に、「目標設定」「振り返り」「全体の振り返り」の学習過程として、以下のような学習活動を仕組んだり、指導を充実させたりした。(表5)

表5 各教科における「目標設定」「振り返り」「全体の振り返り」

	目標設定	振り返り・全体の振り返り
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>「言葉の価値を創造する」ことのできる言語活動の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「授業の振り返り」、「単元の振り返り」、「学期の振り返り」という短期・中期・長期の振り返りを行うことで、自らの学びをメタ認知させ、自己の学習に生かす。</li> <li>教科の学習全体を通して意識させるために、「言葉」についての学びに特化した振り返りを行わせる。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会に見られる事象を教材化する。</li> <li>社会的な見方・考え方を働かせてゴール設定をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が設定したゴールの到達度を振り返らせる。</li> <li>単元を貫く問いの解決に対して、ゴール設定が適切であったかを評価させる。</li> </ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>数学的な価値を含む現実事象を教材化する。</li> <li>数学的な見方・考え方を働かせて複数の解法を導いたり、複数の数学的な内容を統合・発展させたりすることができる教材を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすることについて、得られた結果を元の事象に戻してその意味を考える力や、様々な事象を活用する力を養う。</li> <li>解決過程を振り返るなどして概念を形成したり、体系化したりすることについて、数学的な見方・考え方の良さを見いだす力や、得られた結果を基に批判的に検討し、体系的に組み立てていく力、見いだした事柄を既習の知識と結び付け、概念を広げたり深めたりする力、統合的・発展的に考える力を養う。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>認識調査を行い、結果に基づいて単元を構成する。</li> <li>身近な現象を取り上げて、既習事項と関連付けて問題を見出させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートを工夫し、授業が進む最中にも振り返りができるようにする。</li> <li>探究の過程を参照しながら振り返りが行えるように、ワークシートの中に記述欄を設定した。</li> </ul>
音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>比較聴取をおこない、新たな発見ができるような内容を構成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業内容や感じたことを書きとめ、振り返りができるワークシートの工夫。音や声の変化については、映像や音声で残し、各自の成長の過程を残し、課題解決へつなげる。</li> </ul>
美術	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒にとって身近な内容を題材化する。</li> <li>生徒一人ひとりの表したいものが見つけられる内容を扱う。(技術差が表れにくい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返りシートに主題(自分が表したいこと)を書かせるとともに、作品の途中経過を写真や文字を使って記録させることで、常に主題を意識させた見通しを持った振り返りをさせる。</li> </ul>
保体	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が運動の楽しさを実感し、創造性が高まるような教具・教材の工夫。グループやペア学習を効果的に活用し、課題解決に向けた協働的な取り組み。課題解決に向けて試行錯誤を重ね、没頭しながら取り組むことができる発問の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保健分野との関連を意識させる。</li> <li>ロイロノートで一枚ポートフォリオを使用し、自己の学びを各学期、単元、毎時間に振り返り、次の単元、授業の見通しを持つ。</li> <li>学習シートに動画や画像を添付することにより自己をより客観的に振り返ることができるようにする。</li> </ul>
技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が理解しやすいように身近なものを教具として使用する。</li> <li>生徒の工夫が反映しやすい内容を扱う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>設計図(今回はプログラムなのでアクティビティ図)を作成し、そこに目標も記入させることで、ゴールを意識して活動させる。</li> <li>ゴールが明確になっていることで、振り返りもしやすくなる。</li> <li>「本時の取り組み方はどうだったか」「次回はどのように進めたいのか」といったことに関しても振り返りシートに記入をさせた。</li> </ul>

英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語材料の使用場面、使用状況に適したパフォーマンス課題の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間指導の充実</li> <li>・単元途中にプレ・パフォーマンスの機会を設け、言語面、内容面からの振り返りを実施する。</li> <li>・正しい知識や表現を示す場面と、自らの気づきによって英語を使いながらブラッシュアップさせる場面とをバランスよく設定</li> <li>・リフレクションシートの生徒間での共有方法</li> </ul>
----	---	---

「目標設定」については、生徒の身近な事物を取り上げて、各教科の見方・考え方を生かして捉えたことをもとにする学習が教科を越えて共通する学習がどの教科においても行われている。また、「振り返り」「全体の振り返り」については、自己評価や相互評価をバランス良く取り入れながら、それぞれの教科の方法を用いて自分自身の学びを認識する学習が多い。全教科で共通して、繰り返し取り組むことで、生徒たちは自然と「主体的な学び」のプロセスモデルに示された学びの姿を通して、主体的に学ぶ方法を身につけ、それを様々な学習場面で活用するようになった。

一方で、生徒が「主体的な学び」のプロセスモデルを意識していたかという疑問が残る。教師からそのような言葉を示していないことも要因の一つであるかもしれないが、生徒の記述等に何か体系的な学びの姿や学び方を意識したのが見られないからである。今後さらに生徒の、学びに対する主体性を高めるためには、生徒自身が身につけた学び方について自覚させ、現在の自分自身の学びをモニターしたり、調整したりすることができるよう働きかけることが必要であると考えられる。

### (3) 「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立て

新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等の育成を目指して、各教科で以下のような学習活動を仕組むことができた。(表6)

表6 各教科における「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等」を育成するための手立て

国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「言葉」を用いる全ての場面において、吟味させる。</li> <li>・課題解決のために生徒自らに学習活動を選択させる。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会に見られる課題の解決について考えさせる。</li> <li>・社会に新たな課題を見出させ、その解決に向けて考えさせる。</li> </ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容のふり返しを行うことで既習事項とのつながりを見いだし統合したり、既習事項への新たな価値付けを行ったり、物事を明瞭・簡潔に表現したりすることを通して、数学を創造する体験をさせる。</li> <li>・未知の学習内容や現実事象における課題に対して、既習事項を活用して問題解決していく経験を通して、知識や数学的な考え方を身につけさせる。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・批判的思考の情意面である批判的思考態度に着目し、常に自己の学習過程を振り返りながら学習を進めさせる。</li> </ul>
音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい知見や技術を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結び付けながら考えていく。</li> </ul>
美術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題を中心にして、生徒が思考を深められる発問を設定</li> <li>・導入で行う鑑賞では自分が実際に制作をするときの過程を意識したワークシートを作成する。</li> <li>・試行錯誤できる教材の設定。(今回はiPadのアプリを使用)</li> <li>・生徒間の対話の設定</li> </ul>
保体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習した知識及び技能とのつながりを考えた教具・教材、発問の工夫</li> <li>・仲間との協働的な学習場面やICT機器を活用し、生徒との表現活動の場の設定</li> <li>・失敗を恐れず、挑戦しようとする取り組み、発言したりできる雰囲気づくり</li> </ul>
技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの工夫に対して、他者に示すための力</li> <li>・自らの工夫に対して、その結論に至った経緯を表現する力</li> <li>・周囲の条件などを考慮して、作品に工夫を付与する力</li> </ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手意識を明確に持つことができるパフォーマンス課題と評価規準の設定</li> <li>・評価規準(ループリックの文言)が、見方・考え方、主体性、創造性を発揮できるものとなっているかどうか。</li> </ul>

ただし、各教科における「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等」が明確になっていない教科もあり、暗中模索の状況であったことは否めない。また、そうした育成したい資質・能力の不明確さも一因となり、「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等」を育成のための手立ての有効性も示し切れていない。今後、「創造性」を具体的な生徒の学びの姿としてより明確にしていけば、それに伴って、

「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力等」もより具体的に示すことができるようになるはずである。

## 6. 2年次の研究

(1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立て

昨年度の課題を踏まえ、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を言語化し、生徒と共有することを目指したい。

「学習方略」とは「学習の効果を高めることをめざして意図的に行う心的操作あるいは活動」（辰野、1997）であり、「学習活動を効果的、効率的に行うために学習者がとるさまざまな方法」（木村、2015）である。なお、各教科の学習指導要領に示された見方・考え方や総合的な学習の時間の学習指導要領に示された「考えるための技法」は、各教科や学校の教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力やそれらの育成するための学習の過程に含まれるものである。「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」は、生徒たちが主体的に見方・考え方を働かせたり、「考えるための技法」を活用したりして、学ぶことができるようにするための「学び方」といえる。

これまで教師が意識的に活用したり、生徒がこれまでの学習の成果として無自覚に活用したりしていた「学習方略」を言語化し、明確にすることで、生徒自身が自らの学びをモニターしたり、調整したりできるようになると考える。また、生徒と教師、生徒同士が共有することで、教師の指導が伝わりやすくなったり、生徒同士の学び合いがさかんになったりすると考える。その学びの姿は、「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした学びの姿であるといえる。ただし、教師が言語化したものを与えるだけでは、「主体的」ではないと考える。生徒の学びの中から紡ぎだされたものであってこそ意義がある。

2年次は、授業実践の中で生徒とともに主体的な学びにおける「学習方略」を練り上げていきたい。これらの「学習方略」は、生徒自らに学びを調整させるという点において、2（2）で述べた GRIT を高める支援としての「自己調整学習を促す指導」でスキルとして伝えたり、共有したりする「学習方略」として捉えることができる。

(2) 「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立て

2年次は、各教科における「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を明確にした上で、その育成のための手立てを整理したり、新たな手立てを考えたりしたい。また、「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を見取るための評価を工夫し、その評価をもとに教師が指導の改善を行うことができるようにしたい。

## 7. 2年次の成果と課題

(1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立て

「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」を言語化し、生徒と共有することを目指して、各教科で次のような工夫を行った。（表7）

表7 「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「学習方略」の言語化と共有のための工夫

国語	・生徒が学習課題の達成に向けて、自ら学習計画を立て、自らの学習を言語化する取り組みを行った。（「学びの計画書」）
社会	・生徒とともに学習を振り返る時間を設定し、その中で「学習方略」を整理した。
数学	・「遂行」「振り返り」「方略調整」の部分で、教科総論に挙げた学習方略を生徒が授業の中で行うことを念頭に置いて、授業を計画・実践した。
理科	・ワークシート内に生徒が学びの様子を自覚できるようなチェックボックスを作成
音楽	・ICTを活用し、自分の姿を音声や映像で記録し、振り返ることや自分の音声や映像と他者の発表を比較して、自分の演奏を見返すことを意識的に行うことで、「学習方略」の言語化を実践し生徒自身の学びの調整に繋がった。学びの見通しを生徒にもたせた。
美術	・既習の学習内容を踏まえながら、生徒と共に各活動における意味を考えさせ、取り組むようにした。 ・班の隊形で活動を行い、つねに生徒がまわりの仲間と相談できるように行った。
保体	・ICTを活用し、「自分の姿を映像に記録し、振り返ること」、「自分と他者の映像を比較し、他者の考えを受け入れ作品を再構築すること」を意識的に行うことで、「学習方略」の言語化を実践し生徒自身の学びの調整に繋がった。学びの見通しを生徒にもたせた。
技術	・ICT機器を活用した振り返りを行った。 ・毎時、振り返るポイントを設定した。
英語	・言語学習におけるストラテジーを学習方略のスキルとして伝え、生徒と共有した。

「学習方略」が言語化され、学習集団の共通のスキルになったことで、生徒相互での教え合いが容易になり、協働的な学習の成果が上がるようになったと考える。また、学習目標に対する自らの学習の到達点を客観的に捉えられるようになったことが、生徒の振り返りの記述から読み取れた。自らの学習の姿を正確に捉えられるようになったことで、これまで以上に、生徒が粘り強く学習に取り組んだり、自らの学習を調整できるようになったりする場面が増えた。

生徒がこれまでに身につけてきた「学習方略」を言語化し、学習集団の中で共有することで、それを意識的に活用しようとする生徒の姿が見られるようになった。これは、生徒が見方・考え方を生かして学習に取り組み、教科の本質や授業のねらいに迫る学習を行えるようになったことを意味すると考える。

一方で、言語化され、共有された「学習方略」そのものやその活用頻度に偏りがあったり、本研究や各教科で育みたい資質・能力との関連性が薄い「学習方略」があったりして、「創造性」の育成や各教科の目標の達成につながらない学習活動になる場面も見られた。

## (2) 「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立て

各教科で「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を定義し、その育成のために次のような工夫を行った。(表8)

表8 各教科における「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成するための工夫

国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉の価値を創造することは、国語科における「新たな価値の創造」であり、「新たな意味や考え方を見出す思考力・判断力・表現力」であることから、作品の言葉に着目し、その言葉の捉え方の変容を促す取り組みを行った。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>複線型の授業を積極的に取り入れ、学習課題に対して、自らの考えをまとめ、表現させる時間を増やした。</li> </ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>創造性を、数学的な見方や考え方として捉え、考えさせる授業の中で問題解決型の授業を行い、プロセスモデルの2周目を生徒が自ら進められるように授業を計画・実践した。2周目を回すことが、思考力・判断力・表現力を高める鍵になると考えている。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>探究の過程を意識し、生徒の考えが現れるように「仮説設定」「実験計画」「考察」「学習の整理」の場面に応じてワークシートの構成を工夫した。</li> </ul>
音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>知覚した音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、感受したことと関連づけながら考えることができるような授業の工夫を行った。</li> <li>必要に応じて、音だけではなくICTを活用して演奏している様子などを提示した。</li> </ul>
美術	<ul style="list-style-type: none"> <li>動機づけに繋がる題材や発問の工夫をした。</li> <li>工夫して表現してみたいという動機づけに繋がる構想を深めるワークシート（ICT）や画材を工夫するとともに、生徒間の対話の場を設定した。</li> <li>鑑賞の能力に関して、形や色等の表現と特徴に注目させるワークシートの工夫と鑑賞資料の選定した。</li> </ul>
保体	<ul style="list-style-type: none"> <li>「教師視点の目標提示」や「生徒視点の個人目標の設定」、「話し合い活動の工夫」といった手立てを設定した。仲間との「創作活動」を通して、生徒の発言や学習カード、グループカード、ICT等を使用して創作作品の変容を見取り「思考・判断・表現」の評価に繋げようと考えた。</li> </ul>
技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポート課題を設定し、それを複線型の授業で扱った。</li> <li>製作物の設計においてICT機器を活用した。</li> <li>製作物の発表を行う時間を設けた。</li> </ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>エンドプロダクトとなるパフォーマンス課題設定の工夫と既習事項を結びつける発問の工夫を試みた。</li> </ul>

育成したい資質・能力を明確にしたことで、より効果的な学習活動を仕組むことができた。学習の成果物から、生徒の思考の高まりを見取ることができた。また、思考が深まることによって、生徒の意欲が高められ、学習課題に粘り強く取り組んだり、自らの学習を調整しようとしたりする姿が、これまでよりも見られるようになった。

一方で、生徒の思考した内容が、教科として育みたい資質・能力に対して不十分なこともあった。その原因の一つとして、「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」について、評価規準を立てることが難しく、生徒に対して事前に明示できないことがあったことが挙げられる。評価規準を立てる上で難しかった点は、生徒の思考する内容の幅が広いこと、A評価の具体的な姿を想定することが難しいことなどが挙げられる。また、もう一つの原因として、生徒が思考したことが各単元で完結してしまい、その後の学習につなげることができなかったことが挙げられる。

## 8. 3年次の研究

3年次は、これまでの研究成果を整理し、「主体的な学び」のプロセスモデルを生かした、「新たな価値を創造する生徒」を育むための授業実践のあり方についてまとめたい。

「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させた学びを実現するための手立てについては、2年次の課題を踏まえて、これまで生徒と共有してきた「学習方略」を「創造性」や各教科の目標の達成につながるものへと高めるための手立てを考えたい。その際にポイントとなるのは、各教科の見方・考え方であると考えられる。教師側が各教科の見方・考え方に基づいて、生徒と共有したい「学習方略」を明確にし、生徒が自らの学びの過程でそれを獲得できるよう、学習活動や教師の指導・支援を工夫する。

「新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立てについては、2年次の課題を踏まえて、明確な評価規準を生徒に提示するために、生徒に思考させる内容を焦点化し、B評価の具体的な姿を示すことを目指したい。また、生徒に思考させる内容を焦点化する際には、単元間のつながりを意識し、思考した内容が各単元の学習を重ねるごとに深まったり、発展したりするよう工夫したい。

## 9. 参考文献

- ・文部科学省『学習指導要領 総則 解説』東山書房、2018年
- ・デヴィッド・ボーム『創造性について——新しい知覚術を求めて』コスモスライブラリー、2013年
- ・ベティ・エドワーズ『内なる創造性を引きだせ』河出書房新社、2014年
- ・茂木健一郎『脳と創造性』PHP研究所、2005年
- ・北尾倫彦『「深い学び」の科学——精緻化、メタ認知、主体的な学び』図書文化社、2020年
- ・三宮真智子『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』北大路書房、2018年
- ・大島純編『主体的・対話的で深い学びに導く 学習科学ガイドブック』北大路書房、2019年
- ・水島尚喜「『創造性教育』の意義と向き合い方～人間本来が持つ意味を捉える力の育み～」2021年4月5日 (<https://note.com/lic/n/n9b01eaa099e0>、2022年5月30日)
- ・勝野 頼彦「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書』5巻、国立教育政策研究所、2013年、26-30頁
- ・知的財産戦略本部第3回検証・評価・企画委員会「初等中等教育における創造性の涵養と知的財産の意義の理解に向けて」2018年2月5日 (<https://www.kantei.go.jp>、2022年5月30日)
- ・木村明憲『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書、2023年
- ・文部科学省『学習指導要領 総合的な学習の時間の学習 解説』東山書房、2018年
- ・辻村重子、岡村佳之、蔭山拓人「教科横断的な指導方法と評価に関する研究——学習方略を組み込んだ単元デザインと評価——」『京都府総合教育センター研究紀要』第11集、京都府総合教育センター、2022年、1-28頁
- ・木村治生「『学習方略』の獲得は社会階層の壁を超えられるか——子どもの成績を規定する要因についての考察——」『小中学生の学びに関する調査報告書』ベネッセ教育総合研究所、2015年、1-11頁
- ・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社、2017年